HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	僕の兎
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 87, 1-1
Issue Date	2008-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39254
Type	article
File Information	hemmi_hokekan87.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2008. 9. 30

ほけかんだより

北海道大学保健管理センター　第87号

僕の兎

理事・副学長　逸見 勝亮

◇母親の再婚に伴い、僕は１９５４年１１月から幌別郡幌別町字鷲別７６番地で暮らすこととなった。右隣は母子家庭、左隣も３軒先も筋向かいも再婚同士・連れ子の家族で、誰もが寄り添って暮らしており、僕ら新参者を奇異の眼で見る人はいなかった。新しい父は近所では偏屈で通っていたが、母を介した付き合いが拡がるにつれ、我が家への来訪者も増え、時にたまり場ともなった。１９５５年３月までは鉄道あるいはバスを利用して室蘭市立天沢小学校へ通学した。学校では旧姓で通した。同年４月からは幌別町立（現登別市立）鷲別小学校６年１組の一員となった。

◇天沢小学校では１９５４年４月の５年進級時に学級編成替えがあった。６月には日本製鋼所室蘭製作所では馘首反対ストライキに突入した。級友たちの親は、新富町の食料品店・造船所勤務・バス会社運転手・印刷所経営者以外は、日鋼室蘭労働者であった。４０年も後に僕のクラスでもＳとＯの親が「首になった」ことを知ったが、クラスでは争議を話題とした記憶はない。しかし、炭労の応援物資、文工隊、ロックアウト、第二組合、労働者に襲いかかる警官隊、労働者同士の激突など争議の諸相が子どもの日常に影響しなかったはずはない。この年の遠足の弁当は給食のコッペパン１個であった。僕が「欲しがりません、勝つまでは」というスローガンと労働歌「民族独立行動隊の歌」を覚えたのは、ストライキのさなかであった。僕の伯父も、すぐ下の社宅にいたＯさんも馘首された。Ｏさん一家には４人の子どもがあり、長女は僕と同い年であった。やがて、伯父はヤクルト販売店を営み、Ｏさんは大学職員に転じ、僕ら母子は逸見姓となった。日鋼室蘭社宅街は騒然としており、親しい友人を見出す前の転校は苦にはならなかった。



「僕の兎」と(1955年10月)

◇転校先では、前日に試験問題を練習させる担任を露骨に軽蔑した。彼は口実を見つけては僕を平手打ちにし、通知箋に「性格的に正直、素直さ、真面目さに少々欠けるように見受けられます」と記した。クラスでは級友の家から子兎を２羽譲り受け、交代で飼育した。僕は実父が日鋼室蘭鷲沢社宅の軒先で飼っていた兎・毛皮の鞣し・耳かけやチョッキを思い起こし、兎の世話に熱中した。夏に１羽は野犬に喰われ、僕は当番を無視して残った「僕の兎」に没頭したが、正月には教頭の口に入った。

◇鷲別小学校へは徒歩で１５分ほどであった。ハマナスが咲く海辺で崩れる波を飽かず眺める程度の寄り道はしたが、放課後はまっすぐ帰宅して店番をするようにとの母の懇願に従った。ベルトの芯・穴かがり糸・チャコ・氷酢酸など、見たこともなかった品物を扱うのはおもしろかった。値段はすぐ覚えられたし、家族で働いているという実感は清新であった。日にいくらの売上げがあれば暮らせるのかは判断できなかったが、毎晩１０円硬貨を５００円毎にまとめるのは僕の仕事であった。それにこの街では子どもが働くのはあたりまえであった。Ｅは威勢よく客をあしらいながら手際よく魚をさばいたし、Ｍは上手に櫓を操り、イカ漁では一人前の働き手であった。

◇戦傷を負った養父は、洋服の着脱に多少の手助けを要したので、銭湯へは僕が同道した。上官の背をこするときに垢を目に触れぬようにする工夫、炸裂した砲弾で負った戦傷、装備の劣る八路軍の強さなど、背中を流しながら聞いた。甲種合格、聯隊射撃大会賞状、天津での仕事、防寒服をまとってラクダに跨っている写真、恩賜の義手、従軍記念賜金（国債）の説明は僕から求めた。戸板を載せたリアカーを押し、隣町の小学校の運動会や祭礼に、玩具・花火などを売りに行くのも一緒だった。幌別町苅田神社へは往復４時間以上はかかったが、玩具のブリキのバケツが１０円硬貨で一杯にはなった。

◇母は、再婚した翌１９５５年の実父の命日に、僕を連れて室蘭市御前水町の願隆寺へ参詣した。実父と姉の位牌は再婚時に福井県細呂木村の実家に送ってあり、弔うには元の檀那寺を訪ねるしか術はなかった。鷲別小学校６年生の僕は僕で、５年間通った天沢小学校の学芸会に潜り込み、卒業式にも「参列」した。１９５６年の命日に、僕が行かないのかと訊いたのに対して、母は「止めてくれ」と言われたからと小声で答えた。１９５６年４月、僕は鷲別中学校に進んだ。「逸見」で１年過ぎたのに、入学式に張り出された名簿は旧姓であった。僕は呼ばれても返事をしなかった。その夜小学校の教頭が要領を得ない釈明に来たが、両親は黙したままであった。母も僕も静かに「記憶の断裁」を選び、鷲別での新しい生活は１年余を経てやや「軌道」に乗ったのである。